氏　　名　藤井弘章（ふじい ひろあき）
学位(専攻分野)　博士（人間・環境学）
学位記番号　人博第171号
学位授与の日付　平成14年11月25日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目　日本人とウミガメをめぐる環境民俗学的研究

論文調査委員　（主査）教授 西山良平　教授 内田賢徳　教授 山田孝子
教授 野本寛一(近畿大学文芸学部)

論文内容の要旨

本論文は，日本人とウミガメとのかかわりを環境民俗学的視点から総合的に分析したものである。日本人とウミガメとの関係の歴史は古く，食料資源を始めとして，宗教的なかかわりももっていた。そこで，第1章では，先行研究を紹介・批判しつつ，本論文の環境民俗学的視点を詳細に論じる。カメに関する従来の研究は地域ごとの報告にとどまるものが多く，また狩猟民俗・宗教民俗的な観点で論じたものが大多数を占める。本論文では，近年民俗学のなかで模索され始めている環境の視点を用いた分析を試み，日本列島の各地を横断的に調査し，聞き取り調査のほかに，歴史的な史・資料も用いながら日本人とウミガメとの諸関係を多面的に分析した。民俗学こそ，生態的な知識も踏まえ，ウミガメとの関係を全体的に論じることが可能と考えられる。

第2章では史・資料を用いて，古代・中世から近世・近代のあり方を検討し，とくに近世の紀州田辺でみられた「亀漁」を中心に論じる。近世後期の田辺ではウミガメ漁が行われ，肉や甲羅が流通していた。しかし，田辺の事例は特異で，江戸ではウミガメ肉は多少は流通したもののあまり普及せず，それを販売する者は蔑視されるようになった。近代には，水産行政のなかでウミガメは重要資源と位置づけられるが，ウミガメ肉が全国的に広まることはなかった。一方，近世では漁網にかかったウミガメには酒を飲ませて放す，ウミガメがまとわりついている流木を拾うと大漁になるという信仰習俗が各地に存在していた。

第3章・第4章では主に聞き取り調査により，近代以降のウミガメとの関係を「殺生する」「殺生しない」に大別して検討する。第3章では，殺生を前提にしたかかわりを，祭祀で用いる，捕る，食べる，甲羅を使う，肉などを売る，卵を取る・食べるの6種類に分類した。日本列島の各地で共通するのは捕ると食べるという習俗である。しかし，嗜好に地域差があり，南西諸島・伊豆諸島南部ではアオウミガメ，九州・四国・本州ではアカウミガメが好まれる。また，ウミガメを捕り食べる場合でも，儀礼や禁忌が存在する場合があった。

第4章では，ウミガメを殺生しない習俗を，流木を受け取る，産卵を見守る，波の高さを教えてもらう，放す，殺生を忌避する，死んだウミガメを供養する，以上の6種類に分類して検討した。殺生しない習俗には，波の高さは砂浜に産まれたウミガメの卵の位置によって判断し，魚群の位置はウミガメとともに漂う流木によって判断するなど，ウミガメから自然知を受け取るという内容のものがみられる。また，殺生を忌避する習俗は，沖縄本島から伊豆諸島では一族で忌避する形をとるが，九州・四国・本州では地域全体で忌避するとなっている。

第5章においては以上の分析を総合し，ウミガメの民俗の地域的な差異と時代的な変化を，自然環境や生業との関係を踏まえて検討した。そのさい，重点的に調査した和歌山県を考察の基準とし，その結果をもとに全国的に比較するという方法をとった。日本列島には，殺生する習俗と殺生しない習俗が混在する多様な地域と，一方に偏った単一な地域があり，それぞれ自然環境や生業に強く影響を受けている。まず，和歌山県南部や高知県では多様な関係が認められる。このうちカツオ

漁が盛んであった地域では，カツオとアカウミガメは同じ時期に同じ海域に出現するので，カツオを呼び込むため，アカウミガメを銛で突き捕っていた。一方，和歌山県北部のように内海に面し網漁を行っている地域や，岩手県のようにウミガメの産卵がみられない地域では，殺生しない単一な関係しかなかった。ところが，沖縄県や伊豆諸島では人々とウミガメが接触する機会が多く，潜水漁でアオウミガメを捕獲し，もっぱら殺生ばかりを行った。さらに，時代的な変化に関し述べると，殺生・不殺生の両民俗が混在していた和歌山県南部では，明治末期・大正初期と，昭和40年代の二時期を画期として，自然環境や生業の変化とともに，殺生忌避が広まり殺生しない方向に変化してきた。高知県は和歌山県南部と類似しているが，沖縄県や八丈島では潜水漁や産卵が数少なくなり，それとともに食べる習俗も衰退してきた。

かくして，日本列島におけるウミガメの民俗は，第一に南西諸島や伊豆諸島南部，第二に九州・四国・本州の太平洋岸，第三にそれ以外の不殺生の地域に区分できる。そして，第一の地域では殺生する習俗が衰退し，第二の殺生・不殺生が併存する地域でも殺生忌避が広まっていったのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は，民俗学の立場に立って，日本人とウミガメとの諸関係を丹念に調査し，地域的な特徴と時代的な変化を分析した意欲的な研究である。そのさい，近年発展しつつある環境民俗学的な視点を導入し，さらに自然環境やウミガメの生態と生業を総合的に分析するなど，独自の方法や観点を工夫して成果をあげることができた。

本論文の特筆すべき点は，第一にウミガメを対象としたところである。日本列島の人々は縄文時代からウミガメと関係をもっており，現在では保護活動がさかんである。また，食料資源としての利用から宗教的な関係まで，日本人は幅広く多義的にかかわってきた。反自然的な行動も含めて，自然環境との諸関係を考えるうえでは非常にふさわしい対象である。しかも，文献史料の残存がきわめて断片的で，聞き取りを始めとする民俗学がもっとも取り組みに適した学問である。しかし，従来は民俗学においても地域単位で考察されることが多く，さらに特異な民俗として扱われることが多かった。本論文はウミガメとの関係の多様性や，長期にわたり日本人が関係した点に着目し，それが民俗学や日本文化の重要な課題であることを示すことができた。

第二に，本論文ではウミガメの民俗を全国的な視野から考察したことがあげられる。民俗学の創始者である柳田国男に対する批判から，全国的な民俗事例収集は衰退し，現在では広域的な調査・分析は民俗学の主流ではない。むしろ，近年の一般的な方法は直近の過去を対象とし，特定地域の民俗を全体的・立体的に分析するものである。本論文では柳田の方法に戻り全国的に広範囲な聞き取り調査を行うのみではなく，さらに和歌山県のように重点的に調査する地域も設けて，研究方法の止揚を試みている。このようにして，沖縄県から岩手県まで調査を行ったことにより，自然環境や生業が異なるとウミガメとの関係も相違することが判明した。

第三に，史・資料を用いて歴史的な考察を行ったことである。本論文では，日本の縄文時代から現在に至るまでの文献史料や聞き取りが分析の対象となっている。柳田に対する批判から民俗の起源を探る方法はあまり用いられないが，可能な限り史・資料を収集し検討を加えた。そのさい，歴史学や文学史料はもちろん，民俗学の立場からフィールドワークを行い，膨大な聞き取り資料が蓄積された。昭和40年代にウミガメの民俗が相当に衰退したため，この聞き取りは本論文の調査が最後の機会となるかもしれない。かくして，ウミガメの民俗に，明治末期・大正初期と，昭和40年代の二つの画期があることが明確となった。この結論は，今後の民俗変容研究の指針となると考えられる。

第四に，以上の方法を駆使することによって，日本人とウミガメとの諸関係が地域的に相違し，また時代的に変化することを明快に示すことができた。従来も，たとえば高桑守史が漁民の漁業形態を分類し，それらの性格や信仰などを類型化したように，特定の民俗は同様の自然環境や生業から生まれるという類型論は行われてきた。それらはなお仮説にとどまっているが，本論文は綿密な調査と膨大な事例から，民俗と自然環境・生業などの地域的・時代的な多様性を見事に分析した。南西諸島・伊豆諸島南部と，九州・四国・本州の太平洋岸との地域的な違い，時代的な画期など，大きな成果をもたらしている。しかも，環境決定論とは一線を画して，沖縄県のアオウミガメの潜水捕獲や，和歌山県南部のカツオ漁とアカウミガメの生態との密接な結びつきなど，生態と生業を複合的に考察している。また，広域的な調査をすることで，ウミガメの産卵地の有無は民俗に影響は与えるが，決定的な要因とはなっていないことも明らかになった。

残された課題もある。史・資料があまりに膨大であるため，なお整理が必要であるし，ウミガメの民俗の分類にも一層の精緻さが要求されると思われる。また，ウミガメに集中するあまり，ほかの動物や人間の諸活動との関連がまだ明瞭ではない。とはいえ，本研究によって，これまで日本列島のなかで営まれてきたウミガメとの関係が，現在の画一化したかかわりからは想像もできないほどに幅の広いものであったことが判明した。そのような観点から，今後のあるべき日本人とウミガメのあり方を模索することも可能になると考えられる。また，本学位申請論文は，日本文化の歴史と環境の研究をめざして創設された文化・地域環境学専攻日本文化環境論講座にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成14年９月19日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。